

科学的研究費補助金研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：14302

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730556

研究課題名（和文） セラピストの曖昧さへの態度に関する研究
—心理臨床的援助及び精神的健康との関連—研究課題名（英文） Attitude toward ambiguity in psychotherapy
: Clinical psychological support and mental health

研究代表者

西村 佐彩子 (NISHIMURA SAYAKO)

京都教育大学・教育学部・講師

研究者番号：80457415

研究成果の概要（和文）：本研究は、心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度の特徴を明らかにすることを目的として、心理臨床家を対象とした面接調査と質問紙調査を行った。セラピストの曖昧さへの態度尺度を作成し、セラピストの曖昧さへの態度と心理臨床経験及びカウンセリング自己効力感との関連について検討した。その結果、心理臨床的援助において有用な曖昧さへの態度の特徴が示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify characteristic of attitudes towards ambiguity of therapist. Clinical psychologists were asked to respond interview and questionnaire. This study developed the Attitudes towards Ambiguity in Psychotherapy Scale, and examined the relationship between this scale and counselor activity self-efficacy and clinical experience. The result showed effective attitudes in clinical psychological support.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：臨床心理学・セラピスト・曖昧

1. 研究開始当初の背景

(1) 心理臨床家を対象とした研究の動向

心理臨床において、セラピストのもつ特徴がどのような働きをもつかは、よりよい心理臨床的援助を提供する上で重要な視点である。心理臨床家への社会的ニーズに対して、日本では心理臨床家を対象とした実証研究は少ないことが指摘されている（岩井, 2007）。しかし近年、他対人援助職との比較研究をは

じめ、心理臨床的援助に関連する要因についてなど、心理臨床家を対象とした調査研究が行われるようになってきている（e.g. 古田ら, 2008；高嶋ら, 2007；高嶋ら, 2008）。このように、心理臨床家の専門性を考える上で、セラピストの要因について検討していくことは有用であると考えられる。本研究では、セラピストの要因として、曖昧さへの態度に着目する。

(2) 曖昧さへの態度に関する知見

心理面接場面には様々な曖昧さが存在しており、セラピストが曖昧さに対してどのような態度をもつか、心理臨床的援助に果たす役割は大きいといえる。

日常生活にも曖昧な状況は多く存在する。曖昧さとは、全く新しい事態（新奇性）・複雑な事態（複雑性）・矛盾した事態（不可解性）のように、十分な手掛かりがないために適切にカテゴリー化できない（Budner, 1962）、どのようにもとれない状態（北山, 1988）を指す。曖昧さにうまく対応できないと、問題状況に遭遇した時に対処しきれず、適応を阻害したりそこから回復できなくなることが考えられる。このことは昨今、曖昧さへの否定的態度である曖昧性耐性の低さに焦点が当てられ、不適応との関連を中心に検討が行われてきた（e.g. Frenkel-Brunswick, 1949；友野・橋本, 2006）。それに対して、曖昧さへの態度は肯定・否定の両側面を含む多次元的な態度（曖昧さの享受・受容・不安・統制・排除）から構成されることが指摘されており（西村, 2007）、この視点に立つと曖昧さに対する態度をより詳細に検討することが可能になる。

臨床場面における「はっきりさせたい、ほどほどにできない」などの訴えの背後には、曖昧さへの耐えられなさが視え、クライアントの曖昧さへの態度という視点から臨床事例の理解と援助を試みる意義が示されている（西村, 2006）。

(3) セラピストの曖昧さへの態度

①心理臨床的援助における役割

クライアントが適度な曖昧さへの態度をもてるように援助する際、それに関わるセラピストの曖昧さへの態度との相互作用が生じると考えられる。心理面接場面では、クライアントの心や表現された問題、C1-Thの関係性、心理臨床という仕事の不可視性など、心理臨床家の仕事としての特色であり、心理臨床的援助を提供する上で避けられない曖昧さが多く存在する。土居（1992）が面接において面接者がわからない感覚を保持することの重要性を指摘しているように、セラピストの仕事にとって「曖昧さ」は切っても切り離せず、クライアントのみならず、セラピストが曖昧さに柔軟に対処できる態度が心理面接において果たす役割の重要性が、事例研究を通して示唆されている（西村, 2006）。

このように臨床心理面接を行う際に、セラピストの曖昧さへの態度に着目し、その特徴を明らかにすることは、心理臨床的援助の一助につながる事が考えられる。

②セラピストの精神的健康における役割

一方で、職務内容や職務形態、社会での位置づけといった臨床心理職特有の職場環境の曖昧さも存在し、心理臨床家にはそのよう

な状況に対応する柔軟性が求められるだろう。対人援助職や組織に特徴的なストレス因である役割ストレス（役割の曖昧さや役割葛藤）とバーンアウトとの関連が指摘されている（久保, 2004）。他対人援助職を対象にした研究では、曖昧性耐性の低さが適応に負の影響を及ぼすことが示唆されているが（e.g. 宇津木, 2000）、特に曖昧さと関わりの深い臨床心理職において、曖昧さへの態度が精神的健康に果たす役割は大きいと思われる。

③本研究の視点

以上の心理臨床の特色において、対人援助職の中でも、特に心理臨床家の活動にはさまざまな曖昧さに対処していく力が求められると考えられる。しかし、心理臨床に関する曖昧さでも、心理臨床的援助のなかで生じる曖昧さと、臨床心理職の職場環境の曖昧さとは質的に異なり、これらの曖昧さを一括りにした曖昧さへの態度について検討するのは乱雑であるだろう。また、心理臨床的援助活動の中でも、臨床心理面接において求められる態度と、臨床心理査定やコンサルテーションにおいて求められる態度は異なると考えられる。そこで本研究では、心理臨床家の最も主要な仕事の一つであり、曖昧さと最も切り離し難いと思われる臨床心理面接に焦点をあて、そこで生じる曖昧さに対するセラピストの態度について検討する。

2. 研究の目的

本研究では、心理臨床に携わるセラピストにとって重要な態度について、曖昧さへの態度という視点から検討を行う。心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度のあり方を明らかにすることを通して、よりよい心理臨床的援助について明らかにすることを目的とする。

また、曖昧さへの態度はこれまで否定的態度と不適応との関連を中心に研究されてきたが、セラピストの態度という視点から検討する際には、肯定的態度についても焦点をあてる事が有用であると考えられる。そこで本研究は、肯定的・否定的態度を含む多次元的な曖昧さへの態度（西村, 2007）の視点に立ち検討を行う。

(1) 予備研究

日常場面での曖昧さへの態度（西村, 2007）と、心理面接で生じ得る曖昧さへの態度の側面や特徴は必ずしも一致しないことが考えられる。さらに、セラピストの曖昧さへの態度のあり方も、日常場面における個人としての態度と、臨床場面におけるセラピストとしての態度では異なる可能性がある。心理面接場面における曖昧さへの態度に焦点をあてる意義について検討した上で研究を進める。また、研究の倫理的配慮についても確認を行う。

(2) 面接調査研究

①セラピストの曖昧さへの態度の意味

曖昧さへの態度をセラピストの態度という視点から検討する場合、不適応的要因よりも、より肯定的な心理臨床的援助への寄与との関連から検討することが有用であると考えられる。そこで、セラピストの曖昧さへの態度が心理面接やクライアントに対してどのような意味や働きをもつのかについて検討する。

②セラピストの曖昧さへの態度の分類

日常場面における曖昧さへの態度と心理面接場面における曖昧さへの態度の様相が異なるかどうかを検討するために、心理面接場面で生じる曖昧さに対するセラピストの反応を収集・分類し、その様相について明らかにする。

③尺度原案の検討

予備研究で作成したセラピストの曖昧さへの態度尺度原案の妥当性の検討を行う。

(3) 質問紙調査研究

①セラピストの曖昧さへの態度尺度作成

心理面接場面で生じる曖昧さに対してセラピストがもつ態度の様相と特徴を明らかにすることを目的として、セラピストの曖昧さへの態度尺度の作成を行う。作成した尺度を用い、心理面接における曖昧さへの態度と、日常場面でもっている曖昧さへの態度との関連を検討する。

②心理臨床経験との関連

心理面接における曖昧さへの態度には、セラピストに共通する基本的な態度以外にも、臨床領域や技法などの立場により異なる態度や、セラピストの成長とともに変化する態度があるだろう。経験年数などの心理臨床経験の違いによるセラピストの曖昧さへの態度の特徴を示し、心理面接においてセラピストがどのような態度をもつかの基礎的知見を得る。

③カウンセリング自己効力感との関連

セラピストの曖昧さへの態度と心理臨床的援助との関連について検討を行う。カウンセラーの成長や発達を捉える視点にカウンセリング自己効力感がある(葛西, 2005; Lent & Hoffman, 2003)。そこで、カウンセリング自己効力感の中のセッションマネジメント自己効力感(基本的な面接遂行への自信)とカウンセリング課題自己効力感(困難な問題に対して効果的に面接を行える自信)を取り上げることで、セラピストの曖昧さへの態度が心理面接においてどのような働きをもつかについて検討する。

3. 研究の方法

(1) 予備研究

セラピストの曖昧さへの態度の特徴および研究の倫理的配慮について、筆者を含む臨

床心理士資格を有する心理学研究者4名で検討を行った。

(2) 面接調査研究

心理臨床経験5年以上の臨床心理士有資格者6名を対象に、心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度について尋ねる半構造化面接を実施した。調査時期は2010年3月であった。

面接調査は以下の内容で構成されていた。

①心理面接における曖昧な場面の想起、②心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度尺度原案への回答と妥当性評価、③曖昧さへの態度についての質問:a)各態度が心理面接においてもつ意味、b)状況・経験・日常生活での変化、④心理面接における曖昧さへの態度の自由反応。

(3) 質問紙調査研究

調査時期:2011年9月~2012年2月

調査対象:心理臨床家495名に調査票を配布し、299名から回答を得た(回収率60.4%)。質問紙②~④に欠損値のない277名(男性64名、女性206名、無記入7名、臨床心理士有資格者192名、経験年数1~40年、大学院生含む)を分析対象とした。なお、質問紙③は現在心理面接を行っている244名からのみ回答を得た。

調査内容:①心理臨床経験(経験年数、勤務領域、主とする技法、クライアントの年代)、②セラピストの曖昧さへの態度尺度(本研究で作成):34項目、6件法、③カウンセリング自己効力感尺度(葛西, 2005):セッションマネジメント自己効力感尺度10項目、カウンセリング課題自己効力感尺度(クライアントの問題、カウンセラーとの関係葛藤)16項目、7件法、④日常版曖昧さへの態度尺度(西村, 2007):26項目、6件法。

手続き:無記名の郵送回収形式で行った。

4. 研究成果

(1) 予備研究

①セラピストの曖昧さへの態度の検討

日常場面での態度を測定する「曖昧さへの態度尺度(西村, 2007)」について検討を行った。その結果、特に「曖昧さの享受」を中心とした複数の項目においては日常場面とは意図が異なり、心理面接場面では生じにくい態度であることが想定され、日常場面における曖昧さへの態度と心理面接における曖昧さへの態度の様相は異なる可能性が示唆された。そこで、心理面接場面において想定しにくいと考えられる項目を修正・削除した上で新たに想定し得る項目を追加し、「心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度尺度(原案)」を作成した。

②研究の倫理的配慮

研究における倫理的配慮について確認を行った。

(2) 面接調査研究

①セラピストの曖昧さへの態度の意味

心理面接における曖昧な場面・状況（面接1）について収集された反応は、Budner (1962) の曖昧さの定義に従い、新奇性事態・複雑性事態・不可解性事態に分類された。

セラピストの曖昧さへの態度が心理面接においてもつ意味（面接3-a）について、収集された反応の分類を行った結果、肯定的意味7カテゴリー、否定的意味5カテゴリーに分類された。肯定的態度（特に享受）が肯定的意味を、否定的態度（特に排除）が否定的意味をもちやすい傾向がみられたが、「統制」は面接での判断や対処に役立つ、「不安」は面接の展開や理解の深まりにつながるという反応もみられ、セラピストが曖昧さに対して肯定的態度のみならず否定的態度をもつ場合がある可能性が示唆された。

②セラピストの曖昧さへの態度の分類

心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度の自由反応（面接4）について分類した結果、日常場面における曖昧さへの態度の5分類と概ね合致し、心理面接場面では「不安」「受容」が意識されやすかった。また、特に「享受」は日常場面尺度項目と面接調査で得られた反応にずれがみられ、日常場面では曖昧さへの興味が先立つ反応が多いが、面接場面では関心をもち考えたり積極的に関与していく態度として位置づけられた。セラピストの曖昧さへの態度の詳細を捉えるためには現行の日常版尺度では不十分であり、新たな尺度作成の必要性が示された。

③尺度原案の検討

心理面接における曖昧さへの態度尺度原案の項目の妥当性の回答（面接2）と自由反応（面接4）をもとに再度検討を行い、最終的に日常版尺度から2項目削除、11項目修正、10項目追加の計34項目の尺度を作成した。

Table 1 に心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度についてまとめた。

Table 1 曖昧さへの態度とその特徴

肯定的態度	享受	曖昧さを肯定的に評価し、関心をもちながら関与していこうとする。
	受容	曖昧さをそのまま認めて受け入れられる、親和性や寛容さ。
否定的態度	不安	曖昧さに不安などの情緒的混乱や、それに伴う対処の難しさを感じる。
	統制	曖昧さを否定的に評価し、知的に把握・対処して明らかにしようとする。
	排除	曖昧さを認めず、排除して白黒つけたい。

(3) 質問紙調査研究

①セラピストの曖昧さへの態度尺度作成

セラピストの曖昧さへの態度尺度に因子

分析を行い、最終的に5因子29項目からなる尺度を作成した。第1因子「曖昧さへの不安」第2因子「曖昧さの享受」第3因子「曖昧さの排除」第4因子「曖昧さの統制」第5因子「曖昧さの受容」で構成された。項目数の少ない「曖昧さの受容」以外の下位尺度において信頼性が確認された。下位因子は日常版曖昧さへの態度尺度とほぼ同様であったが、下位尺度を構成する項目に異なりがみられ、心理面接場面に特有のセラピストの態度を測定できる尺度となっている。各下位尺度の平均値は、「享受」が最も高く、次いで「統制」「受容」が高く、「排除」が最も低い結果となった。

セラピストの曖昧さへの態度と日常場面の曖昧さへの態度の同一下位尺度間の相関係数はほぼ中程度の相関がみられ ($r = .35 \sim .65$)、日常場面と心理面接場面での曖昧さへの態度の関連が示唆された。また、同一態度以外にも、心理面接での「排除」と日常での「受容」に負の相関がみられるなど、日常的にもつ態度が心理面接での態度に影響する可能性についても検討する必要性が考えられた。

②心理臨床経験との関連

経験年数、勤務領域、主とする技法をそれぞれ独立変数、セラピストの曖昧さへの態度の下位尺度を従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果、経験年数で「不安」 ($p < .001$, 5年以下 > 10年以下・11年以上) と「排除」 ($p < .05$, 5年以下 > 10年以下) において有意差がみられ、経験年数が短いほど否定的態度をもちやすいことが示された。心理臨床経験が長いほど、心理面接に応じた態度をもつようになると考えられる。主要な勤務機関では、「享受」「排除」「受容」に有意差がみられ ($p < .05$)、教育領域は福祉領域に比べて享受と受容を感じやすく排除を感じにくかった。領域の特徴に応じて求められる態度が異なる可能性があるだろう。主とする技法では、「享受」「排除」に有意差が ($p < .01$) 「不安」に有意傾向差がみられた。主な技法が特でない人は、心理面接における曖昧さに対して享受を感じにくく、排除と不安を感じやすかった。技法をもつことが、曖昧さへの否定的態度の低下につながる可能性がある。また、何らかの技法を志向する人は、心理面接における曖昧さに対しても関心をもって関わろうとする傾向が覗えた。以上より、心理臨床経験によって曖昧さへの態度の特徴が異なることが示唆された。

③カウンセリング自己効力感との関連

セラピストの曖昧さへの態度とカウンセリング自己効力感の相関係数は「享受」「受容」が正の相関、「不安」「排除」が負の相関を示し、特に曖昧さへの「不安」が心理面接の自己効力感の低下と関連した ($r = -.48 \sim$

-.52)。また、「享受」は基本的な面接の遂行やC1-Thの関係において生じる問題に対処することについてより関連がみられるなど、肯定的態度でもその役割が異なることが示唆された。

セラピストの曖昧さへの態度にクラスター分析を行った結果、4 クラスターを抽出した (C1 非統制群、C2 肯定的態度優位群、C3 否定的態度優位群、C4 統制群)。カウンセリング自己効力感を従属変数とした一要因分散分析を行った結果、主効果が有意であり ($p < .001$)、曖昧さへの肯定的態度は心理面接における自己効力感の向上に、否定的態度は低下につながる結果となった。また、統制群は肯定的態度優位群の次にカウンセリング自己効力感が高く、曖昧さへの否定的態度である「統制」は、他の態度とのバランスにより必ずしも心理面接における自己効力感を低下させるわけではない可能性が示された。

(4) まとめ

本研究は、心理面接における曖昧さへの態度の様相と特徴を実証的に示した点に意義がある。特に、「曖昧さの享受」は心理面接に肯定的な働きを、「曖昧さへの不安」と「曖昧さの排除」は否定的な働きをもつことが示された。また、曖昧さへの態度のバランスについても考慮していく必要が考えられた。臨床実践からの知見や面接調査で示唆された「曖昧さの受容」や「曖昧さへの不安」がもつ肯定的な働きについては、質問紙調査では十分な結果が得られなかった。その理由として、心理臨床的援助の指標をカウンセリング自己効力感で測定したことが考えられる。カウンセリングへの自己効力感が高いということは、効果的に面接を行えるという自信があるということであり、例えば統制の態度をもつ人が心理面接において自信をもちやすかった可能性もある。本研究課題の成果を受け、今後もセラピストの曖昧さへの態度について検討を重ねていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計5件)

- ① 西村佐彩子、セラピストの曖昧さへの態度と心理臨床経験の関連、日本教育心理学会第54回総会、2012年11月、琉球大学
- ② 西村佐彩子、セラピストの曖昧さへの態度とカウンセリング自己効力感の関連、日本パーソナリティ心理学会第75回大会、2012年10月、島根県民会館
- ③ 西村佐彩子、心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度尺度の作成、日本心

理学会第76回大会、2012年9月、専修大学

- ④ 西村佐彩子、心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度(2)—セラピストの曖昧さへの態度の分類—、日本心理学会第75回大会、2011年9月15日、日本大学
- ⑤ 西村佐彩子、心理面接におけるセラピストの曖昧さへの態度(1)—曖昧さへの態度がもつ意味について—、日本心理臨床学会第30回大会、2011年9月3日、九州大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 佐彩子 (NISHIMURA SAYAKO)

京都教育大学・教育学部・講師

研究者番号：80457415